

法隆寺古瓦の調査

平城宮跡発掘調査部

考古第三調査室では今年度、奈良・平安時代の軒平瓦について調査・研究を行った。

奈良時代の西院の軒平瓦240A 白鳳時代末期の229Bの文様の系統をひく。范型切り縮め以前(Aa)は桶巻き作りで製作され、范型切り縮め以後(Ab)は一枚作りで製作される。顎の形態は法隆寺の直線顎の伝統を守っているが、Ab段階後半で削り出し段顎例も存在する。瓦の分布から西院僧房の軒平瓦の可能性が高い。Aaは奈良時代初期には少くとも製作が開始されたが、量は少なく、1枚作りの出現期である天平5～10年頃にAbに切り縮められて再使用される。

奈良時代の東院創建の軒平瓦234A 平城宮式6691Aと同范である。東院創建軒瓦は皇后宮所用の6285A-6667Aをモデルとしている。234Aは一枚作りで製作されるが、顎の形態は恭仁宮例や平城宮例が典型的曲線顎であるのと異なり、過渡的な曲線顎である。また、范傷も東院例が少ない。東院完成以前の天平11年に234Aは集中生産され、范型は恭仁宮用へ転用される。

平安時代の東院改修の軒平瓦242 貞観元年、藤原良房の援助の下、道詮は東院改修を開始する。桧皮葺き建物を本瓦葺きに改修したため大量の軒平瓦242A・B・Dが生産される。Aは粘土板1枚に顎用粘土を数枚付加する。B・Dは粘土板2枚を重ねて製作され、その後11世紀前半までの技法の中核をなす。しかし、9世紀中頃の布目はまだ密であり、その後徐々に粗くなる。

平安時代の西院講堂等再建軒平瓦254A 延長3年焼失の講堂が65年後の正暦元年に再建された時の軒平瓦は254Aであろう。南都で稀少なこの文様は当時平安宮で多用されている。諸先学の指摘の通り、法隆寺別当を派遣した東大寺を介して平安宮の瓦当文様が導入されたといえる。

平安時代後期の軒平瓦 11世紀中頃以降、法隆寺別当は永承大火後の再建を進める興福寺出身者があたり、興福寺や薬師寺を介して瓦当文様と製作技術上の影響を受ける。228Aでは初めて顎貼り付け式段顎が出現、217Bでは離れ砂が採用され、246Aでは曲線顎・段顎が共存、246Bでは折り曲げ式段顎も登場する。まさに中世へ向う技術上の過渡期といえよう。(佐川正敏)